性の多様性が認められる社会を作るために

―ジェンダー教育から考える―

細 見　千 明

目次

はじめに

１．同性愛者に対する認識
　１．１　同性愛者とは
　１．２　同性愛者に対する差別や偏見
　　１．２．１　同性愛の歴史
　　１．２．２　同性愛者に対する差別や偏見

２．メディアの中にある同性愛のステレオタイプ
　２．１　オネエタレントから受ける同性愛のステレオタイプ
　２．２　テレビドラマから受ける同性愛のステレオタイプ

３．教育の現状
　３．１　性教育を扱わない日本
　３．２　異性愛主義の浸透
　３．３　教師の現状

４．性の多様性が認められる社会を作るための教育の在り方
　４．１　現在の教育の問題点
　４．２　今後の教育の在り方
　　４．２．１　保健の教科書に記載する内容を変更する
　　４．２．２　生徒が主体性を持って学ぶ授業へ
　　４．２．３　教員への性教育指導の実施

　おわりに

　参考・引用文献

はじめに

セクシュアルマイノリティという言葉を近年よく耳にするようになった。私自身も、当事者と実際に会ったり、話したりする機会があった。しかし、それは大学に入ってからの出来事であり、高校生までは当事者に会ったこともなければ、セクシャルマイノリティという言葉も少し耳にする程度であった。その当時抱いていたセクシャルマイノリティへの印象は、テレビ番組に出る「オネエタレント」と呼ばれる女装をした男の人であり、普通の人とは違う特別な存在だと認識していた。自分の日常生活にはかかわりを持たない存在だと思い込んでいたのである。しかし、大学でセクシャルマイノリティについての講義を受講し、知識を身につけることで、今まで抱いていた印象は誤ったものであると気がついた。更に、当事者の友人と共に生活することで、セクシャルマイノリティの人は、自分に身近な存在であると感じた。そこで、学校という多くの人が通うことになる機関で正しい教育を受け、当事者を身近に感じるような環境をつくることが出来れば、世の中にあるセクシャルマイノリティへの差別や偏見を取り除けると考えた。このような思いから、日本のジェンダー教育の在り方について考えたいと思い、このテーマを設定した。

本論文では、性の多様性が認められる社会を作る一歩としてのジェンダー教育の在り方への示唆を得たい。

まず 1 章では、同性愛者の正しい知識を確認した上で、時代の流れの中でどのように同性愛者は認識され、同時にどのような偏見や差別が生まれたのかを確認する。続く 2 章では、テレビが同性愛者にたいして与えるステレオタイプについて確認する。その後に続く 3 章では、現在の日本の教育にある課題を整理し、4 章では今後の教育がどうあるべきか、検討していきたい。

１．同性愛者に対する認識

１．１　同性愛者とは

同性愛者の定義を定めることは、非常に困難である。それは、性が多様な要素から成り立っているからである。そこで本節では、生駒、池田ほか編（2012）の記述を参照しながら、同性愛者について確認する。

同性愛とはなにか、性愛の対象が同性であることを意味する。しかし、実際にはこの一行では言い尽くせるほど単純ではない。石丸（2007）も、一見理解しやすいように見えるが、実際にはいくつかの側面が考えられる多義性を含む概念として同性愛を捉えている。本論

は同性愛者を研究の対象とするため、まず同性愛者という概念を整理しておきたい。

そもそも性はセックス（生物学的性）やジェンダーを含めた多くの要素から構成される複雑な概念である。そこで生駒ほか編（2012:70-87）を参照しながら、性の複雑な構成を確認しておきたい。性は①生物学的性②ジェンダー③性自認の三つがある。①は生まれながらの身体的機能からわかる性であり、生物学的に男または女に大部分の人がわけられる。男性はペニスがあること、女性は生理がくることなどが、私たちが普段の生活のなかでわかりやすい性別学的性であろう。②は、人間の社会や文化がつくりだした性の概念である。身なり、しぐさ、外見、そして時には、人格パーソナリティもそれに含まれる。例えば、髪型は女が長く、男が短いことが多く、男性で髪の毛が長いと男らしくないと言われることがある。つまり、ジェンダーは性別的な性とは関係なく、人間の社会や人の文化がつくりだしたものである。③は、自分をどのような性だ、と認識した性のことだ。これは、生得的なものか育つ環境の中で認識するものかは、いまだにわかっていない。

次に確認すべき概念として、性的志向という概念がある。性的指向とは、性的欲望や恋愛感情の対象が同性/異性のどちらに向かうかをいう。同性愛とは性的指向が同性であるということである。有馬ほか編（2010）によれば、Money(1979)の同性愛者を“外部性器の解剖的な形態が自分自身と同じ人間に対するエロティックな反応（同性に対する恋愛感情や性的なファンタジーを含む）を示すもの”とする同性愛の定義が最も支持されている。しかし、この定義では、先に述べた②ジェンダー③性自認については言及していない。そこでこの論文では、社会的な圧を受けることなくアイデンティティのままに性表現できる社会を目指していくことを目的とするために「自分の性自認に違和感が無く、同性に対して性的魅力を感じる者」を同性愛の定義とする。

ここで、よく問題に上がるのがトランスジェンダーやバイセクシュアルとの混同である。性は多様な要素で構成されるために複雑ではあるが、同性愛の正しい認識のためにもセクシャルマイノリティについて確認していく。セクシャルマイノリティのなかでも、LGBT という言葉は良く耳にするであろう。L（レズ）=性自認が女性であり、性愛の対象が女性、G（ゲイ）=性自認が男性であり、性愛の対象が男性の人である。つまりは、同性愛者である。そして、B（バイセクシュアル）=性愛の対象が異性、同性のどちらも含む人のことを指し、T（トランスジェンダー）＝生まれた時の生物学的な性と、性自認が一致していない感覚を持つ人を指す。トランスジェンダーと同性愛という概念は混同しがちであるが、トランスジェンダーは、どちらの性に魅力を感じるかは関係が無い。同性愛者は、自分の性に違和感はなく、魅力的に感じる相手の性別に規定される概念である。しかし、今は LGBT 以外にも多く性が存在するので、LGBT という言葉も徐々に使われなくなっている。

１．２　同性愛者に対する差別や偏見

現代社会では同性愛者に対して、偏見や差別が残っている。しかし、歴史を遡ると同性愛は当たり前であった。その歴史を遡り、現代にいたるまでの過程を確認していく。

１．２．１　同性愛の歴史

日本の同性愛という概念の起源を遡るには、男性同性愛の歴史をたどることが必要である。それは、日本では同性愛の変容を問う研究は、男性同性愛の研究が先行してきたからだ。そこで、男性同性愛に対する認識の移り変わりを主に確認しながら、どのように同性愛が認識されていったのか、古川（2001）の論文の記述をまとめ、確認する。古川（2001）は、男色、鶏姦、変態性欲、を三つの転換期（時代順に並んでいる）とし、キーワードとして用いている。

明治以前は男性愛の同性愛は「男色」と呼ばれていた。平安時代から男色関係が存在しており、平安から鎌倉にかけては稚児と僧侶との男色関係、江戸期になると武士の世界における男色関係が流行した。武士の男色関係は肉体のみならず精神的なつながりも重視され、価値のあるものとして認識されていた。しかし、このように流行した男色文化も江戸後期にはいくつもの政治的な改革により衰退していった。

明治維新により日本の社会は再編され、鶏姦罪という条例が制定された。その中の規定された内容としては、同性愛行為をした人間は、それが合意の上であったとしても処罰を受け、さらの強姦は重刑に処されるというものである。まさに、同性愛行為そのものが犯罪となったのだ。しかし、この鶏姦罪を支える社会的・文化的基盤が脆弱だった点や合意の上での同性愛行為をどのように取り締まるのかという問題点が浮上した点から、実際の社会において人々の性行動や性意識を変容させるだけの力は持ち合わせていなかったのである。そして、明治 15 年に施行された旧刑法から鶏姦罪が除かれた。ここまで述べてきたことから、男色という概念は賛美されるものであったが、鶏姦という概念にはマイナスのレッテルが結びついたことがわかる。しかしながら、今一度確認したいのは、同性愛を異常とする見方はまだ現れていないことである。

学生間の男色文化は、大正期になるまで勢力を維持していた。しかし、大正から昭和にかけて、男色を肯定する文化が崩壊し、性に対する人々の意識が根本的に変わっていくのである。明治 44 年（1911）に起きた女学校の卒業生同士による心中事件をきっかけに、明治末から大正期にかけて女学生の同性愛が注目を集めた。女学校では、同性愛が盛んであることが述べられ始めるのである。そこで頭を悩ませたのは教育関係者である。女学校での教育は良妻賢母教育であり、女性と恋愛関係となり男性を拒否することに至れば、その教育自体を否定することに繋がるからだ。したがって、このころの雑誌や新聞等では、教育関係者や医者、学者たちによって女性どうしの「正しい」友情と「間違った」恋愛の区別の方法が語られ始めたのである。

このように同性愛は問題視されるようになった。更に、同性愛を社会の全面へと問題化したのが、通俗性欲学とよばれる書物や雑誌である。通俗性欲学とは、一般大衆にむけて性的な知識を啓蒙しようという学問である。通俗性欲学者は、大量の書籍や雑誌、一般雑誌に登場し、性に関する知識を広げていった。そして、通俗性欲学では同性愛と自慰を性的な危険性の代表として取り上げたのである。特に同性愛は性的な異常すなわち変態性欲の主要なものとして取り上げたのである。女学生どうしの関係を良く思わない教育関係者にとって、変態性欲としての同性愛は、正常―異常の分別機能となったのだ。いままで述べてきた社会的な役割をなぞった男色や、身体的な行為として問題化された鶏姦とは違い、個人化された性のなかに異常と正常を発見する、新たな同性愛概念が生まれたのである。

１．２．２　同性愛者に対する差別や偏見

古川（2001）の記述から、同性愛がどのように認識されたか、また、同性愛に対する異常という認識がどのように生まれたのかを確認した。そして、そのとき生まれた異常というレッテルは今もなお残っている。では、現代社会では同性愛者に対して、どのような偏見や差別があるのだろうか。

私の友人に同性愛者がいる。その友人に今まで生活している中で差別や偏見を感じたことはあるかと質問すると、「そんなのいっぱいあるけれど、一番は会話内に出てくる同性愛者への嘲笑は嫌だった。」と言っていた。マスメディアや日常生活のやりとりの中で「レズ・ホモ・オカマ」ネタで同性愛者が侮蔑、嘲笑の対象になるような状況下で成長すると、小さい頃から同性愛者に対する否定的なイメージや態度が刷り込まれる（池田ほか編 2012）ので、意図的ではなくとも会話の中に同性愛者を差別する発言や偏見を持った考えが流通していたことが一つの原因だと思われる。更に、学校生活でのいじめを受けたことがあるか、という調査によると、小・中・高におけるいじめ被害を受けたことがあると答えた人は 6 割、その中でも言葉によるいじめ被害率が 63.8%[1]と意識的に言葉を使ったいじめの実態も伺える。

また、職場における同性愛者に対する調査でも、以下のような結果が出ている。

> 全回答者（1,000）名に、職場の上司･同僚･部下等が、いわゆるレズビアンやゲイ（同性愛者）、バイセクシ ュアル（両性愛者）であった場合、どのように感じるか聞いたところ、「嫌だ」が 7.5%、「どちらかといえば嫌だ」が 27.5% で、合計した『嫌だ（計）』は 35.0%、「どちらかといえば嫌でない」が 29.8%、「嫌でない」が 35.2%で、合計した『嫌でない （計）』は 65.0%となりました。職場に同性愛者や両性愛者がいたとしても嫌ではないという人が多数派であるものの、 抵抗を感じるという人も 3 人に 1 人の割合

[1] 日高康晴「REACH Online 2016 for Sexual Minorities」http://www.health-issue.jp/reach_online2016.pdf (2017/11/28)

となっており、少なくない様子がうかがえました。連合より）[2]

これからも、社会人となり働きだした職場でも同性愛者は良くない印象を持たれていることがわかった。

以上のように、教育機関にかかる子供時代、さらには社会人になってまでも差別的発言を受け、偏見を持たれる現状があることが明らかになった。更に日本社会では、セクシャルマイノリティを取り巻く社会制度の整備が海外に比べて遅れている。近年、同性パートナーシップ条例が渋谷区に制定され、同性愛者が異性愛同士のパートナーと同じような権利を求められるように変わりつつあることは事実である。しかし、実際にはまだ日本では同性婚は認められておらず、戸籍上は赤の他人のままである。社会の制度として、同性婚についての意識調査をしたところ、同性婚を法律で認めることについて、釜野（2016）の調べによると賛成 14.8%、やや賛成 36.8%、やや反対 25.3%、反対 16.0%であり、賛成が半数を上回った。この結果にも関わらず、長年、同性婚が認められない日本では、まだまだ同性婚の合法化には時間を要することが予想される。

このように、当事者を取り巻く環境は決して理想的とは言えず、世の中に流布している認識、また社会制度の両面を見直す必要がある。

２．メディアの中にある同性愛のステレオタイプ

近年では、同性愛を扱ったテレビドラマ、またセクシャルマイノリティのタレントの露出が増えている。その結果、セクシャルマイノリティの認知度は上がる一方で、誤った認識が進んでいることも否めない。私自身もテレビドラマにより誤った認識をした一人である。そこで第二章では、自分自身の実体験も手掛かりとしつつ、メディアによるステレオタイプについて論じていきたい。白石（2002:3-4）は、メディアの影響について、以下のように語っている。

> メディアの影響が絶対的というわけではありません。たとえば、テレビで暴力シーンを見てもほとんどの人はそれに影響されてすぐに人を殴ったりはしません。しかし、暴力シーンを見ることによって、スカットしたり怖いと感じたりすることはあるでしょし、それによって暴力のふるいかたを学習しているということは考えられるでしょう。～つまり、メディアの内容は「行動面」には影響がなくても、「感情面」や「認知面」では影響を与えている場合が多くあるわけです。

[2] 日本労働組合総連合会「LGBT に関する職場の意識調査」
https://www.jtuc-rengo.or.jp/info/chousa/data/20160825.pdf (2017/11/28)

そして時には、そのメディアの持つ「感情面」や「認識面」への影響力が悪い方向に働く場合もある。渡辺（2012:103）、木村（2008:123）は、メディア内で取り上げられた「オカマ」という言葉が当事者に投げかけられた事例や、テレビを見ていた家族が安易に軽蔑表現を発するのを見聞きする事例を挙げ、メディアの与える悪影響について言及している。実際に、私自身もメディアが映し出すイメージと当事者のリアルなイメージがかけ離れていることに違和感を覚えた経験がある。

そこで、テレビ内にあるステレオタイプを分析し、当事者のリアルな姿との差を考察する。

２．１ オネエタレントから受ける同性愛のステレオタイプ

近年、テレビでオネエタレントを見かけることが増えてきた。この節では、テレビに出演するオネエタレントを分析していく。分析対象には、マツコ・デラックス、IKKO に焦点を当てていく。その理由としては、好きなタレントランキングで上位にランクインし、認知度が高いからだ。

女性らしさ、というステレオタイプ

テレビへの露出が多いこの二人にはいくつか共通点がある。その一つは、容姿が女性らしいことである。テレビに出演する際の二人の恰好は、常にスカートやワンピースなどを身にまとっている。また両者とも髪の毛は短髪ではなく、化粧も施している。いわゆる、現代社会でいう女性の容姿をしている。また、言葉遣いは「～なのよ」「～かしら」と言ったような、女性らしい言葉遣いで話す。つまり、現代社会の中で女性を表象する要素が多い。

何かしらに突出した才能がある、というステレオタイプ

そして、オネエタレントがテレビに多く起用されるのは、インパクトが強い等だけが理由ではない。エンタテイメントジャーナリストの麻生氏が「特に、オネエキャラとして番組に出ている人は、得てして、頭の回転が速く、独自の鋭い視点を持っているタレントが多い」[3]と述べたように、一般人とはかけ離れた才能を持つ人がテレビで取り上げられることが多いのである。特にマツコ・デラックスは、「マツコは、なぜここまで人の心をつかむのか」というタイトルでマツコ・デラックスの魅力について語る記事まで書かれている。[4]IKKO もカリスマ美容家と呼ばれ、プロデュースした化粧品の売れ行きは好調であり、トークショーなども多くの場所で開催されている。両者とも分野は違うものの秀でた才能を持ち合わ

---

[3] DIAMONDO online「オネエ大活躍のテレビ番組は LGBT 理解に寄与するのか」http://diamond.jp/articles/amp/124393?skin=amp（2017/12/13）

[4] 東洋経済オンライン「マツコは、なぜここまで人の心をつかむのか」http://toyokeizai.net/articles/amp/95528?display=b&amp_event=read-body (2017/12/13)

せている。

２．２ テレビドラマから受ける同性愛のステレオタイプ

私自身、同性愛に対してあるステレオタイプを認識するきっかけとなったテレビドラマはいくつかあった。その中でも「偽装の夫婦」というドラマは、他のドラマにも感じられる同性愛のステレオタイプがあったので、このドラマを参考に分析していきたい。その分析をする前に、「偽装の夫婦」の内容に少し触れておきたい。天海祐希が演じる嘉門ヒロは、何をするのも完璧かつ美人な図書館司書である。彼女が働いているところに、大学生時代の元彼、沢村一喜演じる陽村超治が現れ、２５年ぶりに再会する。そして、再会した彼はゲイになっていた。元彼から母親が癌で死ぬ前に結婚して安心させたいという願いを聞いた嘉門ヒロは、偽装の夫婦を演じることになる。しかし、嘉門ヒロは一緒に暮らしていくうちに彼のことを好きになってしまい、複雑な気持ちを持ちながら話が進んでいく。パートナーとはどうあるべきか、今ある形に疑問を投げかけるドラマである。登場人物に、ゲイである陽村超治が出てくるので、彼の描かれ方を中心にステレオタイプを分析する。また、登場人物のなかに内田有紀が演じるレズビアン女性、水森しおりも出てくるので、彼女、また彼女に発せられる言葉などから分析していきたい。

同性愛者=オネエ、というステレオタイプ

今回のドラマの中で、普段の生活では語調は変わらないが、ゲイの友人と会ったり、少し感情的になるといわゆる「オネエ言葉」で話すシーンが多く存在する。言葉としては「あらやだ」「～しなさいよ」など語尾が少し変わる。また、嘉門ヒロに対して怒るとき（カミングアウトしている人間に怒るとき）には、一人称が俺から私に変化する。怒るときなど感情的になるシーンでオネエ言葉や、一人称が変化することから、同性愛者の本当の姿は一般的にオネエと呼ばれる女性的な男性であること、を印象付けている。

同性愛者は異質な存在である、というステレオタイプ

同性愛者だとわかった途端に、避けられる存在になることがある。いくつかのシーンが見られる。

幼稚園のお遊戯会の練習で、水森しおりの子供がなかなか練習に参加せずに他の子供たちから詰め寄られるシーンがある。

子ども１「由羽ちゃんなんか気持ち悪い・・・」

子ども２「うちのママ言ってたよ。由羽ちゃんが変なのは、由羽ちゃんママが変だからだって。」

こども３「ねえ先生、レズビアンってなあに」

これらの発言のあとに先生が子供たちの発言を訂正するが、レズビアンの子供、またレズビ

アン当事者は変であるという認識が一般的であることを示している。
また、園長先生がゲイだとわかった途端に、保護者の態度が変化する。その時の保護者の発言として、「うちの子、毎日先生にハグされるって言っているんですけど、それってやっぱりゲイだからですか」「うちの子が影響を受けて先生みたいになっても困るし」「親として先生にうちの子を預けるのは不安です」等、ゲイが病気のように扱われている。

異性愛が正しい、というステレオタイプ

ドラマの中で、陽村超治の母親が登場する。母親の発言から、異性と付き合うことが正常である、と捉えているとわかるシーンがある。また、そのゴールとして結婚を設定していることが伺える。母親のセリフとして、「心配していたのよ。本当はゲイじゃないかって。」「超治に会うたびに、あなたはいつ結婚するの。と言っていたのよ。だからあなたと結婚すると聞いて喜んでいた、、、。」「ヒロさんとの結婚が決まってほっとしている」等がある。ここからもわかるように、ゲイであることは不安要素であり、結婚することによりゲイであるかもしれないという不安を取り除かれる、と表現されている。

２章では、メディアの中にあるステレオタイプについて分析してきた。これらのステレオタイプはリアルな当事者との異なるイメージを与えている。そのリアルな当事者との差が、当事者に対する差別や偏見につながることが問題点である。

ここで、その誤ったイメージを正す時に重要になってくるのが、教育である。私自身、前述した通り、当事者に対する誤ったイメージを持っていた。しかし、大学の授業でセクシャルマイノリティについての正しい知識を学び、さらに当事者に出会うことで、当事者に対するイメージや認識が大きく変わったのである。この実体験から、早い段階からセクシャルマイノリティについての教育が徹底していくことが重要だと考えた。だが、日本の教育は改善するべき点が多いという現状がある。次の３章では現在の初等教育の現状を把握し、問題点を整理していく。

３．教育の現状

３．１ 性教育を扱わない日本

性の多様性を認めよう、という流れが、国際的な動向として見られている。2011 年 6 月には、国際連合人権理事会において、セクシャルマイノリティの人権に関する初の国連決議とされる「人権と性的指向・性別自認（Human rights,sexual orientation and gender identity）」と題する決議が採択され、この決議には日本も賛成票を投じている。（渡辺ほか編　2012）そして、国内においても、法務省・文部科学省による『人権教育・啓発白書　平

成 21 年度人権教育及び人権啓発施策』（2010 年版）に性の多様性の理解を人権課題として取り上げている。実際に法務省のホームページにも、性自認や性的指向の説明を取り上げ、また、性的マイノリティをテーマにした人権啓発ビデオも制作している。しかし、国家をあげて取り組んでいるにも関わらず、文部科学省の「学習指導要綱」には、これらのテーマに関する学習項目は取り上げられていない。ここに本邦の実態が見えてくる。そこで、私自身が高校一年生時に使用していた保健の教科書（髙石:2011）を取り上げ、内容を確認する。保健編は１．現代社会と健康２．生涯を通じる健康３．社会生活と健康の３単元からなっている。２．生涯を通じる健康は大きく分けると三つ内容が記載されており、①心と体の発育②結婚、妊娠について③高齢者の健康である。性の多様性について書かれるべき①の領域は、たったの４ページとページ数が少ない。その上、書かれている内容は思春期におとずれる生殖的な体の変化が 2 ページと、性意識と性行動の選択ついての内容が 2 ページである。また、セクシャルマイノリティという単語さえ記載されていない。ここに、日本の性に関する教育内容の希薄さが表れている。海外諸国の教科書と比較してみると、その差は歴然である。橋本（2015）は海外の性教育をいくつも取り上げている。フランスの高校は、性的アイデンティティと性的指向についても説明する。女性でも男性でもないというように考えられる 3 番目の分類として、北米のアメリカンインディアンのベルダッシュやポリネシアのファフィーヌをあげ、さらに、トランスジェンダー（性同一性障がい者）についても説明している。また、性同一性障がい者と、同性愛者両方のパレードが掲載されている。フィンランドの中学校、高校では、性の多様性、性的少数者を取り上げている。ドイツは 11－12 歳で「性とパートナーシップ」で同性愛について、レズビアンの女性どうしの具体的な説明がある、と多数の海外の事例を取り上げている。各国での性教育が進んでいるにも関わらず、日本の性教育の教育内容、教育課程ともに遅れをとっていることは明らかである。また、ゲイ・バイセクシュアル男性のうち、学校教育で同性愛についての知識を習ったかどうか聞いたところ、7 割近くが「一切習っていない」と回答。「異常なものとして習った」「否定的な情報を得た」が合わせて 25.9%という結果であった。[5]

このように、日本における性教育は他国に比較しても確実に遅れている。さらに、性の少ない情報のなかでも、同性愛に対して否定的なイメージを付けている。今後の日本の性教育の位置づけを再度考えていく必要があるだろう。

３．２　異性愛主義の浸透

私が高校生時に、自分の身の回りには同性愛の友達はいなかった。それは、本当はいなかったのではなく、“見えない存在とされていた”というのが正しいであろう。今では、三十人に少なくとも一人は同性愛者だとされている。つまり、少なからず一クラスに一人はいる

[5]日高康晴「REACH Online 2016 for Sexual Minorities」
http://www.health-issue.jp/reach_online2016.pdf (2017/11/28)

ことになる。しかし、大学の友人に、「高校の時に同性愛者の人は身の回りにいたか」と質問しても「いたことはない」と答える人が大半である。同性愛者が不可視されている原因はどこにあるのだろうか。

その一つとして、異性愛主義が学校に植えつけられていることを原因にあげたい。先に挙げた保健の教科書でも異性愛主義を前提として記載がされており、①の心と体の発育、の領域では「異性の心や体を的確に理解すること」「異性を尊重する態度」と異性を意識させるワードが太線で強調されている。また、②結婚、妊娠についての領域では、男女の結婚の重要性、またその後の家族計画について記載されている。文章の横に挿入されている写真は男女が寄り添う写真であり、文章に記載されている結婚は男女を前提としたものである。

また、授業中にも突然に、同性愛者への差別的発言が発せられることがある。藥師（2017:124）には、当事者の実際の声が上がっている。

歴史の授業で「○○と○○ってホモで、できたたらしいぞ」といってクラス全体が笑った。自分もばれないようにと無理して笑ってたけれど、自分のことを笑っているようでつらかったし、この学校ではカミングアウトできないと思った。（20 代・ゲイ）

中学校の総合の授業で、将来設計をしようという授業があった。「いつ結婚しますか？」「いつ子供を生みますか？みたいな。「私の人生にはそれらが事前に組み込まれていて、時期だけ微調整するものなのかな？」と思っていた。（20 代・レズビアン）

日常生活の中でもすでに教師や生徒の中に、同性愛者＝異常、異性愛＝当たり前、という考えが浸透していることがわかる一例である。

３．３　教師の現状

学校での教師の在り方は、子供たちに大きく影響を与える。それは、生活の大半は学校で過ごすために、接触時間が多いからである。その教師たちは、どのように同性愛に向き合っているのだろうか。

2017 年 6 月、埼玉県蕨市の市立小学校の男性教諭が、五年生の授業中に「誰だオカマは」などと、性的少数者（LGBT など）への差別と受け取られる発言をしたことが毎日新聞で取り上げられた。その教師は生徒の中に性的少数者の生徒がいることを認識しながら、そのような発言をしてしまったと謝罪をしている。さらに、日高の調べによると、学校や職場で差別的な発言を経験した人は 7 割以上で、地域差はあまりなくいずれの地域でも高い[6]ことが分かっている。上記のような教師の発言が含め、学校生活の中で多くの差別発言を受けてい

[6]日高康晴「REACH Online 2016 for Sexual Minorities」
http://www.health-issue.jp/reach_online2016.pdf (2017/11/28)

る。小宮ほか編（2012）によると、教師は親しくなるための潤滑油としての「ホモネタ」、あるいはホモソーシャリティ（男性的同質主義）を利用している、と述べられており、意識的に差別発言をする教師もいることが伺える。このように差別発言の原因として、小宮（2012）は、教師の知識の乏しさ・人権意識の欠落を指摘している。実際に、教師に対する意識調査では、性指向は本人の選択の問題と捉えている人は 38.6%、よくわからないは 32.8%という調査結果が出ており、教師が同性愛に関して誤解、また不十分な知識を持っていることがはっきりとわかる。また、先生がいじめの解決に役立ったか、という質問に対し、「役立った」は全体の 13.6%に留まり[7]、当事者の生徒の相談役には到底なれていない現状がある。

しかし、この現状は教師本人だけの問題にはとどまらない。教師の出身養成機関で同性愛について学ぶ機会があったか、という質問には、全体の 7.5%が同性愛について出身養成機関で学んだという結果であった。[8]つまり、教師自身も学ぶ機会が無いという現実があるのだ。

以上からも、同性愛に対する知識が乏しいこと、またその教師自身も同性愛について学ぶ機会が無いために、当事者の生徒が安心して相談できるはずの教師という相談窓口を失っていることがわかる。

4. 性の多様性が認められる社会を作るための教育の在り方

３章では、日本の教育が抱える問題点を確認した。本章ではそれらの問題点を再度確認したうえで、今後の日本の教育の在り方について論じていきたい。

４．１　現在の教育の問題点

現在の教育の問題点は大きく分けて三つある。一つは、性教育の内容が不十分であることである。2017 年度から使用される高校の教科書に LGBT という言葉が盛り込まれることになったが、義務教育の教科書では取り上げられていないという現状がある。また、他国と比較しても、日本は性教育全般に遅れをとっている。二つ目は異性愛主義が当たり前となっていることだ。これは、高校の教科書が改訂されたと先述したが、未だに保健体育の教科書では異性愛を前提とした記述がなされている。さらに、友達同士の関係でも、同性同士が仲良

[7]日高康晴「個別施策層のインターネットによるモニタリング調査と教育・検査・臨床現場における予防・支援に関する研究」
http://health-issue.jp/ (2017/11/28)

[8]同上

くしていると「ホモ」「レズ」等の言葉がからかいの意味で用いられたりする。このことからも、学校内での同性愛は異常で、異性愛が普通という認識が横行していると言えるだろう。三つ目は、教師が当事者の生徒をサポートできる、知識、経験を持ち合わせていないことである。学校の中での教師は、生徒に正しい知識を教えるべき存在、また、時には生徒の相談できる窓口にならなければならない。しかし、実態としては、教師が同性愛についての正しい知識を身に付けていない、さらには、生徒同士のからかいに便乗する形で、知らぬ間に当事者の生徒を追い詰めているという現状がある。

上述したように、現時点の教育は、当事者の生徒にとって頼れるような機関ではなく、反対に差別を助長するような機関になっている。

４．２　今後の教育の在り方

４．２．１　保健の教科書に記載する内容を変更する

同性愛に対する誤った知識を持つことや無知であることは、差別や偏見を生む原因になりうる。そこで、早いうちからの性教育によって、同性愛の正しい知識を身に付けるべきである。

最初に検討すべき点は、保健の教科書に記載する内容である。上述したように、日本の教科書では同性愛を含むセクシャルマイノリティに関する記載が一切ない。無知は無意識な差別を生んでしまう原因になりかねないので、同性愛者を含むセクシャルマイノリティについて、少なくとも基本的な知識を教科書で取り上げる必要がある。また、日本の教科書で取り上げられている内容は、身体の構造、結婚、また、避妊の仕方等の性＝生殖に繋がるような記載ばかりである。稲葉（2010）は、現在の日本の性に関する教育内容について「同性愛の子どもたちは、生殖というプロセスからの落伍者であったために、公的カリキュラムでは存在を抹殺されてきたのである。現在のカリキュラムの基盤である性を生殖に特化した性概念の深化が図らねばならない」と述べ、性の概念の再考を提唱しているように、教科書での性についての記載の仕方も再検討すべきである。

1990 年代から、**ジェンダー・バッシング**が起こり、性教育もバッシングの対象となった。教育現場にもその批判はおよび「コンドーム教育」「性交教育」と言う言葉で、過激な教育だと非難された。そのジェンダー・バッシングによって使われことが少なくなったのが、ジェンダーフリー教育であるが、田代ほか編（2014）は、ジェンダーバイアスの問い直しと解消という具体的ものを教育課題とするジェンダーフリー教育の重要性を唱えている。田代ほか編（2014）によると、ジェンダーフリ―教育とは「ジェンダーバイアスの問い直し、解消」を目指したもので、具体的には男女混合名簿などを推奨するもの、と書かれている。つまりは、必要な区別は残したまま、必要のない区別は取っ払うという考え方である。そのジェンダー教育について、田代ほか編（2014）は、『「区別されない」ことによって育まれる関係性は、硬直的な男女の区別からの解放でもあり、男とか女とかではなく、一人ひとりの違

いを大切にする、多様性を認め合う関係性を作ることにもつながる。それは、多様な性を生きる子どもたちの人権を侵害しない関係性をつくっていくことを可能にするのだといえる。』と述べている。つまり、性について考えていく中では、ジェンダーも含む性について考える必要があるのである。

このように教科書にはセクシャルマイノリティについての知識を記載することは必要である。しかし、生殖を中心とした男女の差別を意識したような教科書の内容が変わらなければ、知識をただ載せただけになる。そこで、性=生殖という意識から、性＝生殖を含めた広い意味での性という認識に変化させ、保健の教科書の内容を大幅に変更すべきである。

４．２．２　生徒が主体性を持って学ぶ授業へ

次は、性についての学び方である。上記にのべたように教科書の内容を変化させても、生徒が受動的に授業を受けているようでは、意味がない。つまり、生徒が主体性を持って取り組めるような性の多様性についての授業が理想的である。しかし、性の多様性を理解する授業では、「わたしたち/あの人たち」という二項対立的な認識を起こすことがある。渡辺（2012）では、当事者のゲストスピーカーを呼んだ際の受講者の授業の感想から『「異性愛者」である「私たち」は「普通の人」であり「一般」で、「同性愛者」もその枠に入るならば受け入れてもいいよ、という思考のプロセスが見え隠れしている』と述べ、ゲストスピーカーを呼ぶ授業の課題を述べている。また、渡辺ほか編（2011）によると、受講者が自分ごととして学ぶためには、教える側である教員の「当事者性」が問われる。教師が知識を教え、映像資料を見せるだけの授業では、学習者である生徒も知識的理解をなぞるだけのものとなる、と述べており、いかに教師が当事者性を持ち授業を行えるかが大切になる。

ここで、藥師（2017:136-141）を参照し、Rebit の教育実践を取り上げたい。Rebit の授業実践は、生徒の主体性を持ち、かつ、教師が当事者性を持ちながら行う授業の好事例である。

Rebit 出張授業の特徴

Rebit の出張授業には二つの特徴がある。一つは、多様な性という切り口を通して、性の在り方を含めたどんな違いも受け入れ合って行くことの大切さを伝えること。二つ目は、「授業を受ける人にとって身近な授業をする」ことである。Rebit 授業講師は主に性的マイノリティの大学生が務め、年代的にも、またグループワーク形式で距離的にもできるだけ受講者に近くすることを大切にしている。多様な性を知識として知るだけではなく、体感的に感じてもらう授業を目指している。また、発達段階に合わせた授業内容や授業目的を変えている。

小学校での多様な性についての教育実践

小学校の授業は主にグループワーク形式で行う。受講生五人から十人ほどの各班に授業

講師が一人ずつ入り、車座になって対話する形だ。時間は二コマ連続で行うことが多く、休憩時間をはさみながら九十分ほどの授業をする。

授業はまず、一人の授業講師が進行役として前に立ち、全体でミニクイズすることから始まる。幼少期といまで表現する性が変わっているトランスジェンダーの授業講師の幼少期の写真を当てるもの、また、同性愛の授業講師の好きな芸能人を当てもの、の二問を行う。これらのクイズの解答で驚きの声があがり、このことからも性的マイノリティの人に“目に見える形”で会ってこなかったことがわかる。

その後の基礎知識では、「男の子が好きな男の子もいるよ」などと、専門用語は使わずに多様な性について紹介をする。そして当該するセクシュアリティの授業講師にはその場で立ち上がり、実際にさまざまなセクシュアリティがいると実感する一助になっている。

基礎知識の後には、いよいよグループワークに入る。自己紹介をして、生徒との距離を縮め、その後、授業講師が自身のことを話す「ライフヒストリー」を行う。授業講師が持参した紙芝居形式を用いて十分で話す。グループワークの後半は、「みんなが自分らしくいられるスローガンづくりをしよう！」などをテーマに、グループワークを行う。多様な性という枠組みを超えて、「自分らしさを大事にする」ことを、子どもたち自身に感じてもらいたいという狙いがある。

受講者の反応

授業での『友達に「男の子を好きな男の子」「女の子を好きな女の子」「女の子のからだで生まれてきた男の子」「男の子のからだで生まれてきた女の子」がいても、なかよくできそうだと思いましたか？』という質問には、小学校低学年に児童約九七%が「はい」と回答した。また、アンケートの自由記述欄には、「男の子のことを好きな男の子がいてもいいと思った」（一年生）、「男の子が好きな男の子とか女の子で生まれた男の子に会っても、優しく普通の友達として接していこうと思いました」（四年生）、「身の回りにいるかもしれないことを知って、引いたりしないで仲良くしたいなと思いました」（六年生）など、性の多様性を受け止めていく子供たちの姿が見られた。

さらに、授業を通して、性の多様性への理解の枠組みを超えた効果も見られた。「自分で当たり前に思っていることでも、そうでない人もいるんだなとわかりました」「見た目やイメージで判断しないで、人それぞれの性格があるから、その人のいいところを見ると、もっと人に対して広い心を持てるんじゃないかと思いました」など、性の多様性理解につながる側面がみられたり、他者を尊重する意識の向上がみられた。

このように、藥師（2017）を参照し、事例として挙げた Rebit の出張授業は、生徒が主体的に取り組めたことが伺える。さらに、年代の近い当事者が講師となり知識を教え、更にグループワークにも参加することで、受講者は自分ごととして性の多様性について考えられる。また、授業を行う目的として、性の枠組みに捉われない多様性理解を設定することは、

二項対立的な考えを減らすことが出来る。当事者が先生となり授業を行うことは、現実的には難しいが、性の多様性理解へ大きく変化をもたらすこととなる。

４．２．３　教員への性教育指導の実施

教育現場で生徒が一番身近に感じる大人は教員である。さらに、上述してきたような性について扱うことは生徒のプライベートな部分に関わることになるので、生徒と教員にはお互いを信頼する関係を築くことが大切である。しかし、現状としては、教員が教室内でおきる差別やからかいに無意識のうちに加担するなど、信頼関係を築くにはなかなか時間を要するであろう。そこで必要なのは、教師に対する教育実践であるが、徐々に国内では教育機会を提供する取り組みが始まっている。薬師（2017:134）は、文部科学省による教職員向けマニュアル、自治体による教職員向けマニュアルの作成を取り組みとして挙げている。これらのマニュアルには性的マイノリティの子どもたちへの対応などが記載されており、多様な性を持つ子どもたちについての教職員の意識、知識ともに向上させる後押しとなったと評価している。しかし、教員に対する教育機会の提供は教員に変化をもたらす第一歩であるが、現役の教員に対してのマニュアル提供だけでは課題として残る部分もある。稲葉（2010）によると、「教員の多忙さを考えると、同性愛の子どもを包括した性教育を行うためには、教師になってからの研修も大切であるが、教員養成課程の中に性教育で組み込まれているが望ましいであろう。…現場に出た以上、いつ同性愛の子どもに接するかはわからないし、うかつな一言で同性愛の子どもに癒しがたい傷を負わせることがいつでも起こりうる。」と述べ、教員養成課程での性に関する知識や対応を身に付ける重要性を述べている。

さらに教育面での内容を身に付けるとともに、教員が教室内でとる差別やからかいに対する対応の仕方はとても重要になってくる。前川（2012）によると、自身の教育体験をもとに、重要な点『「からかいという差別」の問題点を証明する』、「明確なメッセージを伝える」、「自分の問題として考える」の三点を挙げ、教師が教室内でとる対応の仕方について、言及している。また、木村ほか編（2008）によると、『セクシャルマイノリティの生徒たちは、「保健室の先生に相談して一対一でこっそり話してくれた。そこから詳しい人を紹介してもらったり、当事者の人を紹介してくれた」ことや、「先生は知識とか全然なかったけれど、一緒に相談に乗ってくれた」など、教師が自分を受け容れ向き合おうとしてくれるその姿勢にこそ信頼をおき、心を開くのである。「正しい知識」を得るために、教職員に対してセクシャルマイノリティについての人権啓発や学習会が開かれることは重要である。だが同時に、教師に「知識とか全然なかった」としても、生徒にとってはそのままの自分を受け容れてもらえることが何よりの励みになることを忘れずにいたい』と述べ、ここでの教師の生徒への対応が重要であることを述べている。これらからもわかるように、教師は知識を学ぶと同時に、教室での生徒との付き合い方を学ぶことも重要である。

以上のことから、教師への教員養成課程では、正しい知識を学ぶ機会を設けるとともに、教室での差別やからかいにどのように対処するべきかなどの具体的な対処法、また、教員に

正しい知識を持つこと以上に生徒と真摯に向き合い、問題を解決するという姿勢を持つことの重要性を含めた教員指導をすることが望ましい。

おわりに

以上の検討から、現時点での教育には問題点はあるが、あと一歩踏み込んだ政策を行い、それらに取り組む姿勢を持つことで教育現場を大きく変えられる可能性が見えてきた。教育を変えることで子どもの意識や認識が変わり、日本が同性愛を含めた性的マイノリティへの対応の仕方に変化が現れるであろう。また、メディアが今後どのように同性愛を取り上げ伝えていくかは、作り手となる子どもたちをどのように教育していくかにかかっている。このように、本論文で取り上げたメディアに関わらず、差別や偏見を起こす要因となるものは多く存在する。しかし、その要因を作っている人の意識を変えることが出来れば、今後の日本では差別や偏見が減ってくることは間違えない。そのことからも、今後の日本における教育を変えていくことで、性の多様性を認められる社会に一歩前進できるのではないだろうか。

参考・引用文献

有馬將太,園田直子,2010,「同性愛のセクシュアリティ―研究の視点と展望―」9.89-97
石丸径一郎,2008,『同性愛者における他者からの拒絶と受容―ダイアリー法と質問紙によるマルチメゾット・アプローチ』ミネルヴァ書房
稲葉昭子,2010,「学校教育におけるセクシュアル・マイノリティ」『創価大学大学院紀要』32.259-280
小宮明彦,2012,『「隠れたカリキュラム」とセクシュアルマイノリティー構造的暴力/差別としての異性愛主義的学校文化―」
加藤慶,渡辺大輔編者『セクシュアルマイノリティをめぐる学校教育と支援増補版～エンパワメントにつながるネットワークの構築にむけて』
釜野さおり,石田仁,風間孝,吉仲崇,河口和也,2016,『性的マイノリティについての意識―2015 年全国調査報告書』科学研究費助成事業「日本におけるクィア・スタディーズの構築」研究グループ（研究代表者　広島修道大学　河口和也）編
木村涼子,古久保さくら,2008,『ジェンダーで考える教育の現在』解放出版社
白石義郎,2002,『メディアと情報が変える現代社会』九州大学出版会
髙石昌弘,加賀谷熙彦,他 31 名,2011『現代保健体育改訂版』大修館書店

田代美江子,渡辺大輔,艮香織,2014,『ジェンダー・バイアスを問い直す授業づくり―「性の多様性」を前提とする中学校の性教育―」『埼玉大学教育学部教育実践センター紀要』（13）.91-98
橋本紀子,2015,「ジェンダー・セクシュアリティと教育―海外の性教育関連から日本の性教育を見直す―」『女子栄養大学紀要』46.27-39
古川誠,2001,『「性」暴力装置としての異性愛社会 - - 日本近代の同性愛をめぐって』『法社会学』54. 80 - 93
前川直哉,2012,「学校での同性愛差別と教師の役割」
加藤慶,渡辺大輔編者「セクシュアルマイノリティをめぐる学校教育と支援増補版～エンパワメントにつながるネットワークの構築にむけて」
藥師実芳,2017,「多様な性をもつ子どもの現状と教育現場で求められる対応について」
三成美保編著「教育現場と LGBTI をつなぐ　学校・大学の現場から考える」
渡辺大輔,2012,『学校における同性愛者の「消され方」「現れ方」、ゲストスピーカーを呼ぶ授業の課題と可能性』
加藤慶,渡辺大輔編者「セクシュアルマイノリティをめぐる学校教育と支援増補版～エンパワメントにつながるネットワークの構築にむけて」
渡辺大輔,楠裕子,田代美江子,艮香織,2011,『中学校における「性の多様性」理解のための授業づくり』『埼玉大学教育学部付属教教育実践センター紀要』(10).97-104